慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ポランニー経済人類学の再考 : 統合形態概念のポジション
Sub Title	Rethinking economic anthropology of Karl Polanyi : the position of "forms of integration"
Author	織田, 竜也(Oda, Tatsuya)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2001
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.53 (2001.) ,p.79- 87
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000053-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ポランニー経済人類学の再考

——統合形態概念のポジション——

Rethinking Economic Anthropology of Karl Polanyi

——The Position of "Forms of Integration"——

織　田　竜　也*
Tatsuya Oda

In the general estimation for the theory of K. Polanyi, there is a tendency to concentrate on the presentation that societies have three kinds of patterns in their economies. But this understanding is surface. This paper shows that these patterns the "Forms of Integration" are not a stereotype of societies, but based on the epistemology of three dimensions.

Secondly for the investigation of the contemporary validity of this concept, compares with the concepts of the French sociological-anthropological scholarship led by Durkheim, Mauss, and Bourdieu. This study confirm the position of "Forms of Integration". Namely, this concept is the mediation between the "(collective) structure" and "(personal) action".

At last, shows the dynamic model based on this thinking. This model means that the scope of "Forms of Integration" is not limited of the "economy" in a narrow sense, but extend into the area of "transaction" in human actions.

1. はじめに

カール・ポランニーは晩年のカール・メンガーの仕事を手がかりに，「経済的 (economic)」という語が二つの意味の複合物であることを確認した[1]。それは新古典派経済学に採用された「形式的 (formal)」定義としての「希少性 (scarcity)」と，人間と環境の相関を意味する「実在的 (substantive)」定義としての「相互作用 (interaction)」である。前者の「形式的」定義はポランニーによれば「社会学者，人類学者，経済史家が，どんな時代，どんな場所であれ，その経済を洞察するという仕事に直面したさいに，それは何の役にも立たない［ポランニー 1998: 81］」と厳しく批判される。

だがこの「実在的」定義としての「相互作用」は具体的にどのような領域を指すのか。特にフィールドサイエンスとしての役割が期待される現代人類学においてどのような接合可能性が残されているのかを考察することは，グローバルエコノミーに対応可能な民族誌への一助になるはずである。本稿ではいくつかの理論的問題を整理した後に，ポランニー経済人類学の要とも言うべき「統合形態 (forms of integration)」概念に関する考察を行う。

2. 問題の所在

ポランニーの「統合形態」概念は後にジョージ・ダルトンを中心に「関連様態 (transactional modes)」と説明された。「実在的」定義の「相互作用」のいくつかの形態として理解される。例えばポランニー自身「トランザクション」を二つの領域に区分する見解を示している。その区分は「経済的 (economic)」及び「非経済的 (non-economic)」領域による。後者に「血族 (kin)」「身分 (state)」「呪術 (magic)」「宗教 (religion)」などが含まれる[2]。

「トランザクション」は邦訳では「取引」だが，栗本慎一郎によればルビにはあえて「トランザクション」とふられており[3]，市場における財やサーヴィスの動きを意味する狭義の「取引」だけを示すのではないと考えられている。それを含んだ人間と環境との「相互作用」，関わり合いを包括的に意味する概念として理解される。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程
（文化人類学・経済人類学）

だがここで「呪術」や「宗教」などとは区分された「相互作用」としての「トランザクション」とは具体的にはどのような領域なのか，疑問が生ずる。個別の財やサーヴィスの動き以上の「相互作用」と定義しても具体的なイメージは捉えにくい。したがってまずはポランニーが「統合形態」概念に関してどのようなイメージを付与していたのかを改めて確認する。

またポランニーは経済史研究から出発しているが，「相互作用」のテーマは社会学及び人類学の領域での理論的課題とかなりの部分で重複する。そうした理由からダルトンをはじめとして「サブスタンティビスト」の流れを生み出すことにもなったと考えられるが，そこでの中心的な議論は「未開社会」の「経済」に関する研究であり，「統合形態」概念と社会学・人類学における諸々の概念との関連性についてはほとんど議論がなされなかった。

この点を補う一つの試みとして，社会学・人類学の領域をカヴァーする理論的フレームを持つフランス社会学の諸概念と「統合形態」概念との比較を行ってみたい。とりわけデュルケムにはじまる潮流において「集合表象」概念が用いられる場合，あるいはモースの「全体的社会事実」概念，さらにはブルデューの「実践・ハビトゥス・構造」概念などを巡って「統合形態」概念がどのような関連性を提示し得るのか，有効性を保ち得るのか。こうした考察によって結果的に，「統合形態」概念のより深い理解が可能となるように思われる。

特に「統合」という語から受ける印象によって「統合形態」概念が「○○社会」といったような，社会全体を覆っているある種の「体制」として理解される恐れがある。つまり社会類型論としての「統合形態」概念の理解である[4]。この点は「行為」と「構造」の関係，社会学の大きな問題に触れる必要も生ずるが，ブルデューの概念との比較で議論する。

さらに微妙な問題は「統合形態」概念の抽出プロセスにある。ポランニーはどのようにして「統合形態」を確定し得たのか。この点が人類学との接合にあたっては無視できない問題である。人類学における概念構築は主としてフィールドデータに基づいて行われるが，例えばモースの「全体的社会事実」という概念それ自体はデータを統括する原理として提示されている。またレヴィ＝ストロースによる「構造」概念も同様で，フィールドから直接的に「構造」が読み取れるものではない。だがそれが存在しないという意味ではなく，不可視の原理を可視にすることが目的となっている。したがってポランニーの「統合形態」概念が人類学的にはどのような意味を持つのかは興味深い問題であり，フィールドサイエンスとしての人類学，特にその理論的課題に関する考察が経済「人類学」としては必要なのである。

以上をまとめれば本稿の議論の対象は三つあり，①「統合形態」概念の再確認，②フランス社会学の諸概念との比較，③フィールドサイエンスとの接合である。

3. 「統合形態」概念

本稿の主目的は「統合形態」概念に関する新たな視点の提起である。従来の研究では「統合形態」概念が三種類の型（「互酬」・「再分配」・「交換」）[5] から構成される点を強調する傾向にあった。だがこのことはポランニー経済人類学が「市場/非市場」の分別を社会類型論的に主張すると理解される要因になったとも考えられる。むしろ重要な点は三種類の型に注目するだけでなく，「統合形態」概念が三次元の認識論から構築されている点にあるように思われる。まずは「実在的」定義の問題を導入として考察を進めよう。

ポランニーによる「経済」ははじめに触れた意味で「実在的」な理解が必要だが，その定義は「人とその環境のあいだの，制度化された相互作用の過程［ポランニー 1975: 265］」，つまり「制度化された過程」である。ここで「過程」とは物質的な諸要素が存在する場所に関して，あるいは所有に関してモノが移動する際の「動き」を意味し，それを「制度化」するとは，社会内での明確な構造を創り出し，社会における「過程」の位置を変容させ，歴史的意味を与えるという意味で，統一性と安定性を与えると説明される。

すなわち物質的な諸要素の「動き」がどのように「制度化」されているのかを考察することが「実在的」経済の研究になるのだが，それには諸要素の「動き」に統一性と安定性を与える根拠を求めなくてはならない。ここで登場する概念が「統合形態」である。

「統合形態」概念のポランニーによる説明は，「経済過程の諸要素，すなわち物的資源および労働から財の輸送，貯蔵，そして分配までを結合するような，制度化された移動［ポランニー 1998: 89］」となっている。また「場所の変化であれ，占有の移動であれ，またその両者であれ，統合形態とは，その経済における財や人間の動きがつくりだすパターンをあらわす図式［ポランニー 1998: 89］」とも表現されている。ここで重要なのはこの「統合形態」概念が「移動を表現する図式」である点だが，ポランニーの次のような表現に注目しよう。

> 統合の諸形態と支える構造と個人的行為とを区別すること。[ポランニー 1998: 90]

これに従えば「統合形態」概念は「支える構造」と「個人的行為」と区別されなくてはならない。この部分は特に重要である。本稿が重視する認識論の中心部分である。

先に指摘したように従来のポランニー研究では三種類の「統合形態」を理解することを優先してきた。だがむしろこの三次元の認識論こそが「統合形態」の有効性を説く鍵になると思われる。なぜなら「行為」—「統合形態」—「構造」という認識論は社会科学における行為論からシステム論までを繋ぐ可能性を秘めた視座だからである。その個別の具体的内容については以下のように説明される。

> 人間の経済における主要な統合形態とは，われわれがみるように，互酬，再分配，及び交換 [ポランニー 1998: 89]

> 互酬は，統合の一形態として，財，サーヴィスの動き（あるいはそれらの配置）を，対称的な配列の呼応する点の間にえがきだす。再分配は，対象物が物理的に移動しようと，配置のみが推移しようと，中央に向かう動きと，そこからふたたび外に向かう動きとを示す。図式的表示において，互酬はひとつまたはそれ以上の対称軸に関して対称的に配列する点に結合する矢としてあらわせるだろう。再分配は星状の図表を必要とするだろう。幾つかの矢は中央に向かい，他の矢はそこから出ていくことを示す。そして交換は，任意の点と結合した矢が，おのおの双方に向いているものとして描かれるだろう。[ポランニー 1998: 89-90]

それぞれの統合形態には「支える構造」が想定されている。それは「互酬」に対しては「対称性」，「再分配」では「中心性」，「交換」では「市場性」[6] である[7]。この「支える構造」という概念はやや不明瞭だが，ここでは「統合形態」の型を維持，推進する集団の規範的傾向として理解しておこう。ポランニーによれば次のようになる。

> 対称的に組織化された環境においてのみ，互酬的態度は重要な経済的制度に帰着するだろう。あらかじめ中央の確立されたところにおいてのみ，個々人の協同的態度は再分配経済をもたらすことができる。そして目的にそって制度化された市場の存在のもとでのみ，個々人のバーター行為は共同体の経済活動を統合する価格を結果として生むであろう。[ポランニー 1998: 92-93]

ここでは「統合形態」が「支える構造」との組み合わせによって理解される必要が示唆され，可視の図式としての考察への道が示されている。以上の点を図にすれば以下のようになる。

A：行為	例えば「贈与」	例えば「税」	例えば「買い物」
B：統合形態	互酬	再分配	交換
C：支える構造（集団性）	対称性	中心性	市場性

図 1：三次元の認識論

しかしながらここで語法上の紛らわしい問題が生じてしまう。例えば図 1A の「行為」としての「買い物」が「市場交換」と表現されるような場合，B の「統合形態」としての「交換」，あるいは C の統合を「支える構造（集団性）」としての「市場性」という，三つのレヴェルが言語的に重複してしまうのである。ポランニーはこの点に関して以下のように注意を促している。

> 困難なのは互酬，再分配，交換という用語の一般的用法である。これらは，ここに提示した統合形態と同様，しばしば個人的態度の異なった類型を示すために使われているが，両者は非常に異質な問題なのである。[ポランニー 1998: 90]

さて以上の考察から「統合形態」概念の三次元的認識論を確認したが，ここから提起される問題が二つ想定される。一つは図 1 における B のレヴェルは，必ずしも支配的な「統合形態」として単一的に想定されるのか否かという問題，つまり「統合形態」の複合性を巡る問題である。人類学において「未開/文明」の二項図式が比較的

最近まで維持されてきたことと同様，ポランニー経済人類学が「市場/非市場」の分別を標榜する社会類型論として受け止められてきた面が否定できないからである。

もう一つはポランニーによって「個人的な行為や態度が単純に統合形態を支える制度上の構造をつくりあげるようになる，というのは真実ではない。[ポランニー 1998: 91]」と指摘される点，つまり「行為」—「統合形態」—「構造」の三次元を垂直に貫く関係の動態的考察である。

ポランニーの見解，「行為」の反復的・慣習的集合は制度的な「構造」を創り出すものではないという態度は，フランス社会学におけるデュルケムの「集合表象」概念による学説と重なると思われ[8]，モースを含めた「全体的社会事実」との比較は重要な作業となるはずである。

さらにモースによる「ハビトゥス」概念を援用するブルデューにおける「実践・ハビトゥス・構造」概念との理論的整合性は，「行為」から「構造」を繋ぐ領域の問題としても重要な意味を持つ。尤もこの領域はギデンズによって現代社会学の「ジレンマ」と見なされ，「近代の思想家たちが人間行動の説明にはじめて体系的に取り組んで以来ずっと続いているため，完全に決着する見込みはおそらくないであろう。[ギデンズ 1998: 644]」と論定されているテーマではある。

4. フランス社会学 —「集合表象」概念との比較—

フランス社会学の古典として読み継がれるデュルケムの考察は依然，読む者に何らかの刺激を喚起せずにはいない。宗教社会学の基本的態度を扱った論考「宗教社会学と認識論」[9] において，デュルケムは自らの認識を次のように述べる。

> われわれがなそうとするところは，常に存在し，宗教的思想や行事の最も本質的な形態がそれに依存する原因を発見することである。[デュルケム 1983: 181]

学問の対象としての「宗教」における「思想」や「行事」（これは別の箇所で「観念」や「儀礼」とも表現される）は何らかの「形態」をとる。その「形態」が依存する「原因」を発見するとはつまり，なぜそのような「形態」をとっているのか，という問いに他ならない。

デュルケムは「人間が世界および自分自身に対して抱いてきた表象の最初の体系は宗教的起源を持つもの[デュルケム 1983: 182]」であり，また「宗教がすぐれて社会的な事物である［デュルケム 1983: 183]」と考えた。つまり「宗教形態」に注目することは，宗教的起源を持つ「表象の体系」としての「社会的事実」を考察することになるのである。またデュルケムにとっての社会は次のように説明される。

> 社会は独特の現実である。社会は宇宙の他の部分には見られない，また同じ形においては見ることのできない特有の性質をもっている。社会を表現する表象はそれ故に，純然たる個人的表象と全く異なった内容をもっている。[デュルケム 1983: 190]

この「個人表象」と「社会表象」を明確に分別する態度はきわめて重要であり，「二つの種類の表象の間には，個人的なものと社会的なものを区別する完全な距りがあり，前者から後者を派生せしめることは，個人から社会を，部分から全体を，単純なものから複雑なものを引き出すことができないのと同じように不可能（デュルケム 1983: 190）」であるとの認識が「集合表象」概念を生み出す契機となったと言えよう。それはまた次のような記述において明らかである。

> われわれの経験や科学の広がりがどんなに拡がろうと，われわれ各人の表象するところは現実のごく微視的な一部にしかすぎない。真の小宇宙（ミクロコスモス）たるのは集合意識である。一定の時点における人類の表象の統合された体系が実現されるのは，一時期の文明，すなわちその時期特有の宗教，科学，言語，道徳等によって形成される全体の中においてである。ところで文明というのは卓越して社会的な事物である。実際，それは協力の所産である。それは相継承する世代が相互に結びつけてきたことを予想する。[デュルケム 1983: 197][10]

すなわち社会の全体によって表象される「集合意識」こそが「集合表象」であり，その生成は「社会の中において，社会によってしか可能とならない[デュルケム 1983: 197]」[11] のである。デュルケムによって，学問の対象が「表象の体系」，「集合意識」としての「集合表象」に向けられることとなったのである。

5. 全体的社会事実—デュルケムからモースへ—

自他ともにデュルケムの後継者と認めたモースはこれを受け，呪術に関する論考において次のような手続きをとる。まず呪術を「諸種の社会において他の社会的事実の体系とは明確に区別されていた［モース 1973: 55］」ものとして，同時に「執行者」，「行為」，「表象」を含むものとして定義する。これはそれぞれ「呪術師」，「呪術儀礼」，「呪術表象」として性格づけられる。そしてこれら「呪術師」，「呪術儀礼」，「呪術表象」を呪術の「諸要素」としてきわめて具体的な記述によって明らかにし，最後に呪術にはたらくと思われる「集合的な力」を探求することで，呪術を呪術たらしめる「集合表象」を見出すのである。

それは例えば「呪術師たちは共通の性格を有していて，呪術的行動によって生み出される効果は，その無限の多様性にもかかわらず，つねに共通性をもった何ものかである。［モース 1973: 143］」といった記述からも伺われる。

また呪術の要素に関しては「これらの諸部分が合してまさに一つの全体をつくっている［モース 1973: 143］」と理解され，同時に「全体の統一性のほうが，個々の部分よりもずっと現実的に感じられる［モース 1973: 143］」と表明される。

ここで「諸部分」とは個別に観察される「社会事実」であり，それらを一つの全体として統一するのが「全体的社会事実」としての「集合表象」なのである。モースによれば「全体的社会事実」は呪術以外の諸々の「社会事実」と相互に影響することで構成されるが，注目すべきは次の点である。

> 呪術はそれ故に一つの社会現象である。
> ［モース 1973: 209］

が，しかしながら，あるいはそれ故に

> その様々な目的を追求するなかで個人化し，専門化する。［モース 1973: 209］

この指摘が重要なのは，「全体的社会事実」→個人的「行為」というベクトルが明確に述べられているという意味においてである。このベクトルはモースによれば「われわれは呪術をその個人的性格によって規定し，その後その呪術の下にかくされた社会的現象を見出したのであるから，いまや再びその個人的性格にたち帰ることは容易［モース 1973: 207］」であり，「呪術集団を抜きにして呪術を理解することは不可能であるにしても，逆に，呪術集団が個人に分解したと考えるには何の不都合もない［モース 1973: 207］」と示される。

このベクトルを推進させるのは「教育」と「伝承」のやり方であり，「集合的性格をもつ相対的部分が次第に減少した［モース 1973: 208］」呪術は「その伝承的性格の面でのみ集合性を保つように努め［モース 1973: 208］」，「理論的，実践的作業の面でのそのすべての仕事は，個人の所業であって，そうなると呪術はもはや個人によってしか開発されなくなってしまう［モース 1973: 208］」のである。

ここまでで明らかになったことは，デュルケムにおいては学問の対象は「社会表象」であり，それは人間集団が集合的に創造した「集合表象」という意味において「個人表象」と区別される。そしてモースにおいてはこの「集合表象」は，諸々の要素を全体的に統一するという意味で「全体的社会事実」と認識される。さらに「教育」や「伝承」の仕方によっては「全体的社会事実」としての体系は個人に分解されて存在する可能性があり，その逆は不可能であるとされる。

この点でデュルケムおよびモースの示唆はポランニーの指摘と重なってくることが理解されよう。「全体的社会事実」は諸々の個人的「行為」を一つの要素と見なすが，決してその「反復」あるいは「集積」としては理解されない。いわば諸要素に共通する何らかの体系であり，これはポランニーの説く集団性としての「構造」によって支えられる「統合形態」と，ほぼ同様のポジションを与えられていることになる。

またこの体系は社会類型として理解されない。それはデュルケムにおける「宗教形態」，モースにおける「呪術形態」という対象の性格に影響するものと考えることができる。なぜなら同様にポランニーにおける「経済形態」のみが社会類型あるいは社会体制として誤読される可能性を持ってしまった理由は，その性格が「制度」や「体制」として言語化されてきた領域と言語的に重なってしまったが故に生じた問題であると考えられるからである。

かくしてポランニーによる「統合形態」を巡る二つの問題，①非社会類型論，②非「行為→構造」論は，デュルケムおよびモースの議論との関連では明らかになった。三次元の認識論による「統合形態」は社会類型論ではなく，また諸個人の「行為」の「反復」や「集積」は結果的に「統合形態」を創り出すために作用しないとい

う点でデュルケム，モースの指摘と重なり合う。

6. ハビトゥスを巡るメリーゴーラウンド—ブルデューにおける「構造」と「実践」—

モースは先に見たように体系の「教育」や「伝承」に関心を向け，とりわけ「教育」に関しては「身体技法」を巡る考察として結実する。モースによれば「身体技法」とは社会的構築物であり，「教育」や「訓練」の結果身体に刻み込まれる「型」である。モースはこの「型」をラテン語で「ハビトゥス」と表現し，その社会性に注目することを提言したのである[12)]。

このモースの提起を受け継いだのがブルデューである。ブルデューによれば「ハビトゥスは構造の所産であるが，その構造はハビトゥスを通して，機械的決定論の道にしたがってではなく，ハビトゥスが行なう発明の始めから割り当てられる制約と限界を通じて実践を統御する［ブルデュー 1988: 87]」という意味において，「ハビトゥス」を反復的「行為」としての「実践」と「構造」の双方から挟み込むことに成功したといえよう。

また「ハビトゥス」は「客観的な諸構造がそうである集合的歴史の所産が，その機能の条件たる持続的で調整された心的傾向という形での自己再生産に達するために必要な我有化および教化の労働の産物［ブルデュー 1988: 91]」とされるが，それはすなわち「ハビトゥスを介して行為者たちは制度へと客観化された歴史の性質を帯び［ブルデュー 1988: 91]」，「制度を活動状態に，生ける強力な状態に保ち，制度を死せる文字，死語の状態からたえず引き離し，そこに沈殿せる意味感覚を甦らせるのを可能にする［ブルデュー 1988: 91]」ことを意味する。

つまり「ハビトゥス」の「実践」としての「行為」は当然ながら「構造」に規定されると同時に，諸制度の歴史的集合としての「構造」は「ハビトゥス」を介した諸個人の反復的「実践」によって「生きられる」のである。

これがブルデューによる「構造化する構造 (structures sturucturantes)」および「構造化された構造 (structures structurées)」の意味であるが，次のような場合ブルデューの「構造」はきわめて恣意的な色彩を帯びる。いわば「ハビトゥス」を巡るメリーゴーラウンドが完成すると，この自動循環装置に対して根拠性の薄い概念が貼り付けられていくのである。それは例えば『資本主義のハビトゥス』という魅力的な邦訳がなされた著作における次のような箇所においてである。

> 伝統的な秩序から引き離され，近代的な経済の世界に，しばしば急激に，参入することは，ハビトゥスの徹底的な変化を引き起こし，また，ハビトゥスの変化を前提としていることなのである。［ブルデュー 1993: 61-62]

ここで述べられる「伝統的な秩序」や「近代的な経済」の内容は仮構的である。これは「外部から移植され強制的に課せられた経済構造に，性向やイデオロギーが適応する過程［ブルデュー 1993: 16]」という別の箇所でのブルデューの認識を踏まえれば想像がつく。極論を恐れずに言えば，このアルジェリアの事例によって示された「構造」とは，はじめから存在するかあるいは外部から移植されるものと見なされるばかりか，きわめて仮構的な「政治的・経済的・文化的・歴史的」キャラクターによって彩られる被造物，つまりある種の「風景」として描かれてしまうのである。このような手法は同様に次のような記述においても脆弱さを露呈する。

> 就学期間が短ければ短いほど，選択の幅がより狭くなる，ということは知られていることだ。教育の水準には，明確に，自由の程度というものが対応している。87 パーセントの人々が基礎教育の免状がなく，また，97 パーセントの人々が技術教育の免状をもたない，というような社会においては，職業適性資格の免状や初等教育の免状を持っていることは，経済競争において，断然，有利となる。［ブルデュー 1993: 65]

果してどのようにして「選択」，「自由」，「経済競争」などの概念がここで用いられることになったのか，説明がないのである。したがって具体的事例に関しては隙の多い議論であるにせよ，理論的には本稿で問題としてきた「行為」と「構造」を貫く領域がブルデューによって示されることとなった。

ここでようやくポランニーによる「統合形態」概念を巡る二つの命題，①非社会類型論，②非「行為→構造」論と噛み合う議論が展開できよう。社会類型論としてはむしろブルデューの「構造」概念の方がそれにふさわしい面がある点を指摘でき，事例においては「構造」が「制度」そのものであったり「体制」として描かれる傾向にあることは既に確認した通りである。

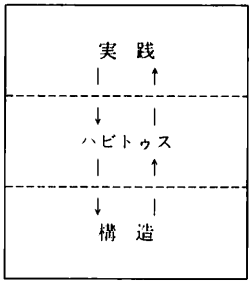

図2：ハビトゥスのポジション

またブルデューは「行為→構造」論を「ハビトゥス」を媒介として肯定するように読める点でポランニーと対立するとも考えられるが，「ハビトゥス」は行為者によって自由に生成されるものではないことから判断が微妙であり，特に注意すべきである。この問題はブルデューによる「行為主体(agent)」の「実践」，および「戦略」概念を踏まえなくてはならないだろう。

ブルデューによる「実践理論(theory of practice)」は客観主義的知，現象学的知を乗り越える知として提唱され，贈与に関するモースの三つの義務（「与える」「受け取る」「返す」）やレヴィ＝ストロースの「構造」は主知主義的かつ形而上学的思考の所産として排される。また「主体的に合理的選択を行うホモエコノミクス」や「モデルに合わせて行動する行為者」，「音素を『「選択する』話し手」などが揶揄される形で批判される[Bourdieu 1977: 30]。

だがブルデューが「日常生活における戦略は，その無限の複雑さを，贈与者の側の表に出さない計算が，受領者の表に出てこない計算を勘定に入れ，したがって受領者の要求を知らないような顔をしながら満足させるという事実に負っている［ブルデュー 1988: 185］」と述べるとき，「戦略」は「行為主体」からは自由に発動されない。あるいは結婚戦略に関する次のような説明によって幾分明らかになる。

> 相続した権力と特権を維持しつつ，あるいは増大させつつ次代に伝えるために集団全体が採用する生物学的再生産諸戦略の全体から，切り離すことのできない結婚戦略は，打算的な理由を原理にしているのでもなければ，経済的必要性からくる機械的決定を原理にしているのでもない。そうではなく，存在諸条件によって教え込まれた心的傾向，いわば社会的に構成された本能こそが原理なのであり，それが，特殊な形式の経済の客観的に計算し得る必要性を，義務の不可避的必然として，ないしは感情の不可抗的な呼びかけとして生きるよう，しむけているのである。［ブルデュー 1990: 30］

以上の考察からは，「戦略」は個人の領域において発動する概念であるが，「ハビトゥス（上の引用では心的傾向）」を介した「実践」として規定されるものであることは「教え込み」を重視することから理解されよう。つまりブルデューにおいても「行為→構造」論は排されていると結論しよう。ただし「ハビトゥス」を介した「実践」によって「構造」は有意性を持つ（「生きられる」）という考察によって，つまり「戦略」概念を巡っては，先に図2で示した単なる循環モデルを書き換える必要が生まれてくる。

モースによって「教育」を通じて「社会性」が「身体化」されると規定された意味で，「ハビトゥス」概念はまさに「行為」と「構造」を媒介する概念としては魅力的な概念であることは否定できない。だがそれを受けたブルデューにおいて，具体的考察は仮構的な「構造」によってなされてしまう。

その理由の一つとして「ハビトゥス」概念が曖昧さを孕んでいることが考えられよう。つまり「行為」と「構造」を媒介する際にはより複合的な視点とそこでの動態的視点が要求されるべきである。このような意味で，ポランニーによる「統合形態」概念は三次元的認識論において「行為」と「構造」を繋ぐ可能性を持ちつつ，フランス社会学においては「社会的事実」と見なされる物質的諸要素をその「動き」に注目することで「過程」と表現し，「過程」の「制度化」において「統合形態」が実現するとして「構造→統合形態」の「動態」を表現しているのである。

7. 「統合形態」概念のポジション

以上ポランニーによる「統合形態」概念を巡って，フランス社会学との擦りあわせにおいて，どのようなポジショニングが可能であるかを探ってきた。

デュルケムによる「集合表象」およびモースによる「全体的社会事実」は，諸々の「行為」を体系として統一する「社会の表象」であるという意味において，ポランニーの「統合形態」ときわめて近しい関係にあることが確認された。また「個人表象」が「社会表象」を生み出

すことは不可能であるというデュルケムの示唆は，反復的・慣習的「行為」が「統合形態」を「支える構造」を創り出すという認識が誤りであるというポランニーの指摘と重なり，さらにモースによる「全体的社会事実」の「個人化・専門化」は，物質的諸要素としての「行為」の「動き」を「過程」とし，その「制度化」の結果が「統合形態」であると認識するポランニーの提言と抵触しない。

そしてブルデューにおける「ハビトゥス」を媒介とする「実践」と「構造」の循環において，「構造→行為」のベクトルをブルデューが支持する点で，また「行為→構造」のベクトルを消極的に批判する点でポランニーとの一致が見られよう。このベクトルは「行為主体」の「戦略」の領域において有効に見えるが，その「戦略」はやはり「構造」によって影響を受けるとされていることは既に確認した通りである。

以上の考察から，ポランニーの「統合形態」概念はフランス社会学の諸概念との比較において幾分明らかになった。さらにその優位性を主張するならば，「過程」の「制度化」という動態的な視点を有している点であることも既に指摘した通りである。

デュルケムの「集合表象」およびモースの「全体的社会事実」は，どのようにして統一性を獲得することができるのか，という考察は行なわれない。またモースの「ハビトゥス」概念は「社会性」が「身体化」されるという説明において「教え込み」という動態的視点を持つが，これはやはり「身体技法」の領域にある程度限定されざるを得ない。この領域を社会関係全般に拡大する場合，ブルデューによるその発展は「ハビトゥス」は「構造」に規定される，という曖昧な展開を見せるに留まるのである。

したがって本稿で行なった考察をより可視的に表現するためのモデルを構築すれば，次のようなモデルが想定されるであろう。まずは「構造」→「統合形態」→「行為」のベクトルを定置する。ここで「構造」は「集団性」に規定されるという意味で両者は重なる領域を持つことを認識しつつ，「集団性」→「構造」としておく。また個人的領域において「統合形態」に順応的あるいは反発的「感情」が発生する可能性を認めるならば，「行為」と「感情」が重なる領域を持ち相互作用を行なうことを認識しつつ，「行為」→「感情」としておこう。

つまり「集団性」→「構造」→「統合形態」→「行為」→「感情」というベクトルをマクロからミクロへ繋げることが可能となる。ここでとりわけ「統合形態」概念が優位性を主張した根拠となる，物質的諸要素の「動き」を「過程」と見なしその「制度化」を視野に入れた，動態的視点を含めることが重要である。また「行為」と「感情」の相互作用はブルデューの個人的領域における「戦略」概念を生かして組み込むことにする。

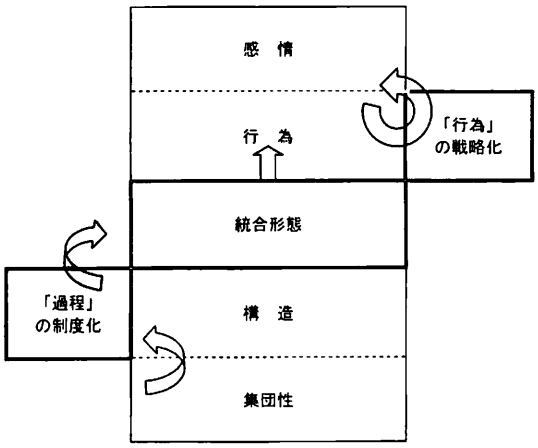

図3：統合形態を巡る動態モデル

このモデルでは「行為→構造」のベクトル，つまり上方から下方へのベクトルは想定されない。また「集団性」→「構造」のベクトルを通じて「過程」の「制度化」が，「感情」→「行為」のベクトルを通じて「行為」の「戦略化」が発動するが，前者は「統合形態」に影響を与え，後者は個人的領域において循環するものとする。ポランニーの「統合形態」概念を巡っては，以上のような認識を踏まえることが重要である。この認識は広義のコミュニケーションの「動態」を包括的に表現する点で，ポランニー経済人類学が主張する経済の「実在的」意味を「過程の制度化」の領域において実現している。

さらに重要なことは，「過程」は何も「経済」に限る必要はないということである。ポランニーが生前に成し得た考察は「トランザクション」が「取引」と邦訳される可能性を内包する領域に限られていたことは否定できない。つまり物質的諸要素の「動き」といっても，狭義のコミュニケーションとしての物質的交換を中心に関心が向けられていたことが指摘できよう。

だが本稿で行なった考察を一つの契機として，「トランザクション」領域全般におけるさまざまな「過程」の「制度化」を視野に収める道が開かれることになるはずである。「オイコノミア」を原義とする「経済」を市場の分析に留めることなく現代的概念に発展させていく場

合,「非」経済領域としての様々な環境を含む領域を循環系として管理するシステムへの視角が必要となる。

いずれにせよ本稿で試みた考察およびモデルによって示された意味で，ポランニーの「統合形態」を巡る三次元的認識論が有効であることは確認された。また「統合形態」概念を広義のコミュニケーション論領域としての「トランザクション」研究へと繋げる道を確認することができた。とりわけその動態的視点は優位性を強く主張することができ，この三次元を貫く領域に関して具体的な「過程」を確定し，その「制度化」を考察することが今後の課題となる。

註

1 「『経済的』という言葉のふたつの意味」『人間の経済 I』[ポランニー 1998] 第 2 章参照。

2 ポランニー，1998: 120-121。

3 ポランニー，1998: 120。

4 尤もダルトンの立場はこれに近く，その意味でポランニーの継承は必ずしも成功したとは言えない。

5 それぞれ「reciprocity」,「redistribution」,「exchange」の邦訳である。

6 「market」は邦訳では当然「市場」となるが，ポランニーの思考を追えば「市場」は本稿で問題となっている統合を生み出す何らかのベクトルとしての「集団性」によって制度化される。つまり結果的「制度」であると見なすことによって，ここでは統合を支える集団「性」を明確にするため「市場性」とした。

7 ダルトンは自らが編集を行なったポランニー論集の序文 [Dalton1968] において，「交換」とは「市場交換」を意味することを強調するのだが，むしろ集団性としての「支える構造」の重要性，つまり三次元の認識論を強調することで配慮を見せるべきであったと言えよう。

8 ポランニー自身は経済制度に注目する態度において，デュルケムを肯定的にとらえていたようである。「経済制度の社会学的方向に関心を向けた幾人かの著者，とりわけデュルケム，ウェーバー，パレートは，その書物のなかで，個々人の行動の様々な類型にとっての社会的な先行条件に一般に注意を向けていた。[ポランニー 1998: 92]」

9 この論文は 1909 年の *Revue de Métaphysique et de Morale* 誌に掲載された後，大著『宗教生活の原初形態』の序文として前半三分の二程度が取り入れられた。本稿では邦訳の論集 [デュルケム 1983] を使用している。

10 この部分が『宗教生活の原初形態』の序文には採用されていない。

11 同，註 10。

12 モース 1976: 127。

参考文献

Bourdieu. Pierre
1977 *Outline of theory of practice.* Cambridge University Press.

ブルデュー，P
1988 [1980]『実践感覚 1』みすず書房
1990 [1980]『実践感覚 2』みすず書房
1993 [1977]『資本主義のハビトゥス』藤原書店

Dalton. George (ed.)
1968 *Primitive, Archaic and Modern Economies.* Doubleday & Company, INC.

デュルケム，E
1983『デュルケーム宗教社会学論集』行路社

ギデンズ，A
1998 [1997]『社会学－改訂第 3 版』而立書房

モース，M
1973 [1968]『社会学と人類学 I』弘文堂
1976 [1968]『社会学と人類学 II』弘文堂

ポランニー，K
1975 [1957]「制度化された過程としての経済」『経済の文明史』日本経済新聞社
1998 [1977]『人間の経済 I・II（特装版）』岩波現代選書